

道端の植物を発端とした対人的事象の生起可能性に関する散種論的考察

光安 輝高

九州大学大学院人間環境学府

Possibility of Disseminative Occurrence of Interpersonal Events from Street-side Plants: A Philosophical Investigation Referring to J. Derrida's Notion of "Dissémination"

Terutaka MITSUYASU

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Summary

The occurrence of interpersonal events from pedestrian viewing of street-side plants (trees, nurtured flowers, natural-growing grasses, etc.) is discussed. The discussion is guided by the notion of "dissémination" by J. Derrida and descriptions of actual experiences of street-side events, including the author's own, in which a pedestrian, when viewing or taking pictures of a street-side plant, was questioned by other passers-by and involved in conversation and relationships with them afterward. These experiences were regarded as an event sequence occurring from the street-side plant, around which the pedestrian-viewing event occurred spontaneously and indeterminably from the plant event (growing, blooming, fruition, etc.); then, another interpersonal event, almost irrelevant to the plant itself, occurred similarly from the viewing event. Derrida's notion of "dissémination," suggesting the reproductive generation of various meanings from a "text" in a manner in which the generation can not be reduced to the reason residing in the antecedent "text," affirms the occurrence of such interpersonal events from plants. The significance of considering interpersonal dissemination from street-side vegetation, in everyday experiences, and both academic and practical fields, is argued.

Keywords : street-side plant / vegetation, interpersonal event, dissémination (dissemination)

道端の植物, 対人的事象, 散種

はじめに

筆者はある市街地の土地区画整理事業地で数年来、道を歩きながら道端の植物を見ている。建物が撤去された後の敷地内に残された植木や園芸植物、敷地と歩道との間に自然に生えた草花など、様々な植物の日々の生育様態を、立ち止まって簡単に記録したり写真撮影したりしながら歩いている。特に、花が咲く、あるいは穂が実るなど、特徴ある生育様態が見られたときに、時間を掛けて撮影するなどしている。

その立ち止まって植物を見たり写真を撮影したりしている際に、通りがかりの人や近くにいる人から「何をしていますか」と声を掛けられることが時折ある。とりわけカメラを構えているときに「何を撮っているんで

すか」と言われることが多い。このときに「この花を見て(撮って)います。〇〇という花で、…」などと答えると、そのまま立ち去る人もいるが、「実は私も草花が好きで…」などと話し始める人も少なくない。そのようにしてその場で立ち話をするのが時々あった。その後その人と道で会うたびに挨拶を交わしたり、家に招かれたりすることもあった。

筆者の体験に限らず、道端や街角にある植物を見たり撮影したりして人と人との関わりが生じるという事態が、少なからず起きていると考えられる。実際、足田(1981)は植物を撮影していて通りがかりの人から話し掛けられるエピソードを数多く書き記している¹。平岡(1999)は日本各地の巨樹を巡る中で、現地で樹を見て絵を描いているときに地元の人たちが寄ってきて会話が弾むということを述べている²。また南(2005)は街角の植物を写真撮影している際にしばしば通行人や近所の人たちから話し掛けられ、その場で植物の話や、植物と

2008年2月12日 受付。 2008年7月25日 受理。
人間・植物関係学会2005年大会で考察の一部を発表した。

は別の話題の四方山話が始まって、立ち話をしてしまうというエピソードを書き記している³。

こうした事態は、道端や街角に植物が生育していて、それを人が立ち止まって見ることで起きていく事態であり、植物を「発端」として対人的な事象が起きていく事態と捉えることができるように思われる。植物が事態の起きる前提でありながら、植物あるいは植物の呈する事象からそれとは別の対人的な事象が生起していくということである。

このような、何かの事物からそれとは別の事物が生起するという事態について論じたものに、フランスの哲学者・文芸批評家J. Derridaによる「散種dissémination」の議論がある。Derridaは何かの起源と目される事物からその起源の所為に帰すことができない形で多様な意味合いの事物が発生することを「散種」という語で表し、様々なジャンルにおける事物の発生について論じている。

この「散種」の議論を踏まえると、植物を発端として対人的事象が起きていく事態を、道端の植物からの対人的な「散種」と捉える捉え方が成り立つのではないかと考えられる。「花は人の心にも花を咲かせる」「幸せの種をまく」といった表現が日常的に見聞されるが、それらに準じて、タンポポの綿毛が風に乗って飛んでいくように、道端の植物から対人的事象の／対人的事象という「種」が放たれて飛散し、様々な事象が生起していくと捉えることができるのではないかということである。

本稿ではDerridaによる「散種」の議論を参照して、道端の植物から始まる対人的事象の生起を植物を発端とした「散種」的な事態として捉えることを試みる。まずDerridaの散種の議論を概観し、次いで道端の植物から対人的事象が生起していく事態を散種の議論に照らして、そのような事態における「散種」性を考証する。その結果を踏まえて、人間と植物との関係性を捉える新たな観点として、植物を発端とした散種的な対人的事象生起という捉え方を提示する。この観点に立って、道端や街角の植物を発端として様々な事象が生起する可能性、そして現に生起している可能性を理論的に予見し、あわせて従来人間－植物関係研究および実践の分野で述べられてきた「媒介」（きっかけ、媒体）という観点と散種的な発端という観点との相違について論じることで、植物を発端とした散種的事象生起の観点が人間－植物関係の研究・実践をはじめ各方面において示しうる意義について議論したい。

1. Derridaの散種論

哲学・文芸批評の分野で多くの著作を著したDerridaは、テキスト（文章）の読みにおいて一つのテキストから様々な意味が読まれることについて、意味がテキストの「元々の意味」に還元できない形で多様に生まれると論じ、その議論において「散種」という語を登場させた

(Derrida, 1972)。その後Derridaは狭義のテキスト論にとどまらない様々な問題領域における「起源に帰すことができない」事態について、また何かの事物からその「元々の意味」を離れて多様な事物が発生することについて、「散種」の語とともに議論を繰り広げた。

Derridaの散種の議論は「意味素sème」と「種semen」という二つの語の類似から着想されている（デリダ、1972）。林（2003）の解説によると、disséminationという語は元々植物学の用語で、風が種子や花粉を撒き散らしたり果実が自然にはじけて飛び散ることを意味するが、Derridaは「意味の散乱」というニュアンスでこの語を用いている。たとえばDerridaは、テキストの読みにおいて意味が発生的／生殖的に産出されること、生まれる意味が多様でその数が非－有限であることを論じ、読まれるテキストの意味を著者の意図などの単一の根源に帰したりその全体を一つに取りまとめようとしたりすることに対する批判的考察を行っている。

「散種は何かの単一の始源的な現前者へと、(...)あるいは何らかの終末的な現前性へと、自らを送り遣らされるままにしません。非－有限数の意味論的諸効果を生産するためです。散種は、ある還元不可能な、発生的＝生殖的な多様性を標記しているのです」（デリダ、1972）⁴

テキストに関する散種の議論においては次の二つのことが強調されている。一つは、テキストに元々含まれている意味が「解説」されるのではなく、意味が「発生」するということである。もう一つは、発生した意味が「元々の」何かに帰しないということである。テキストの著者が何の意図や事情でそのテキストを書いたのであろうとなかろうと、テキストが読まれるときに意味は多様に発生し、そこで発生した意味はテキスト側（著者側）の意図や事情には帰属せず、意味の発生をそれら起源の所為にする、すなわち還元することはできない。テキストからのそうした起源に還元できない多様な発生を「散種」の語の下で「肯定」することが、これら散種の議論における主眼になっていると考えられる^{5,6,7}。

Derridaは文章（狭義の「テキスト」）のみでなく、何らかの意味作用を持つ人間の経験一般を「テキスト」とみており（デリダ、1989；高橋、2003）、実際Derridaはこの散種の議論を文章論にとどめず、他の文脈＝コンテキスト、たとえば贈与・親子の関係・西洋文化の世界的拡張といった様々な問題系において展開している^{8,9}。そこでは、生まれたもの・一見与えられたかに見えるものが、その「親」・与えたものに帰属せず回帰しないことが特に強調されている。

「散種は、父親に帰属しないものを表わすのです」（デリダ、1972/2000、傍点原文）

〔筆者注：贈与について議論する中での論述〕散種とは、返礼〔復帰〕なしに与える仕方です。（…）つまり、それは再帰しない何かなのです。そして私はこうつけ加えました。散種とは、父へ再帰しないものである、すなわち、一見したところ与えているように見える者に決して復帰しないものである、と」（デリダ、1989）

つまり、広く人間の経験において様々な事物を「親」としながら、そこから「親」には帰属しない別の意味の新たな何かが発生し、それを「親」の所為に帰したり「親」が「収穫」（高橋、2003）として回収したりできないということが、これら様々な問題系において論述されている「散種」の一つの謂であると考えられる。

この「散種」の語の下でのDerridaの議論は、一見「親」とみえる何かから、それと意味内容上は無関係でもありうる別の「意味／種」が、「親」の所為に帰することができない形で新たに数多く生まれていくような発生性、生起可能性を指摘していると考えられる。人間の経験一般の様々なコンテクストにおけるそのような発生性・生起可能性が、散種の議論を通して示唆され、「散種」の語の下で肯定されていると考えられる。

この散種の議論に照らして、上述したような道端の植物に端を発する対人的事象の生起という事態をみると、その事態がどう捉えられるか、そしてその捉え方からどのようなことが示唆されるのか、以下で考察したい。

2. 道端の植物からの対人的事象生起における「散種」性

筆者の体験や南（2005）のエピソードのように、道端に咲いている花に目が止まり、立ち止まって見たり撮影したりしているときに、通りがかりの人から声を掛けられて立ち話が始まり、四方山話になるという事態がありうる。このような事態がどう推移するかを想定すると、おおまかに次のように表すことができるであろう：

まず、道端に花が咲くという出来事が起き、花が咲いている状態がその場で続き、その花に人が目を止め立ち止まって花を見たり撮影したりするという出来事が起きる。さらに、その人が花を見ている／撮影している状態がその場で続き、その様子を通りかかった他の人を見て、撮影をしている人に声を掛けるという新たな出来事が起き、立ち話が始まり、四方山話になる。

この事態にはDerridaが論じていた散種の性質を窺わせる点が認められる。それは、ある事象から別の新たな事象が継起するようにみえる点である。道端に花が咲いていることから人が足を止め、その人が花を見続けあるいは撮影することから他の人との立ち話が始まったとみえるのである。このような事態の展開は果たして

Derridaのいう散種に相当するのかどうか考えてみたい。

この事態の一連の展開は、ある出来事（花が咲く）が起きてそれが一つの事象としてその場に位置を占め、その事象を受けて別の出来事が起き（人が立ち止まって花を見る／撮影する）それが事象としてその場に位置を占め、さらにその事象から新たな出来事が起きる（別の人が声を掛ける）というように捉えることができる。

この展開は、一つの先行事象から新たな出来事＝後発事象が継起するという先行事象～後発事象の継起の構図が連なって、最初の先行事象から継起した後発事象が次に先行事象となって新たな後発事象が生起するという形で推移しているとみることができる。

この事態の各々の局面の展開（花が咲いている～人が立ち止まって花を見る／撮影する、人が花を見ている／撮影している～他の人が声を掛ける）において、後発事象は先行事象を前提として生起するとみられる。たとえば、花を見て立ち止まった人は花が咲いているから立ち止まったものとみられる。また花を見て写真を撮っている人に声を掛けた人は、誰かが何かを撮影している様子に見えたから声を掛けたものとみられる。

このとき、もし後発事象の生起が先行事象の「元々の意味」に還元されてしまうのであれば、つまり後発事象の生起理由が先行事象の所為に尽きるのであれば、そのような発生はDerridaが論じた散種的な発生とは異なるものである。たとえば先行事象がその後発事象を生み出すために企図されたものであったとき、あるいは先行事象が必然的にその後発事象を生起させるものであるとき、その先行事象の所為で後発事象が生起したなら、それは単なる一意的あるいは決定論的な生起であって、散種的な生起であるとはいえない。後発事象の生起が先行事象を前提としながらも、先行事象やその生起事由に還元できないような独自の生起であるときに、その生起を散種的な生起とみることができると考えられる。

道端の花を見て通行者が足を止めるという出来事が実際に起きたとき、それは植物の側の何らかの（おそらくは生物学的な）事由で花が咲き、そのように咲いた花をたまたま目にした通行者が事後的に自発的に立ち止まったのだと考えられる。その通行者がそこを通過して立ち止まったのもその人独自の事由があると考えられる。そうすると、その人がそこを通過して立ち止まったことを単に花が咲いていたことだけに還元することはできないであろう。同様に、道端の花を撮影していて他の人が声を掛けてきたとき、花を撮影していたのは通常はその花を撮影しようと思図してのことであって、声を掛けた当の人にそこを通らせて声を掛けさせるために撮影をしたわけではないであろう。声を掛けた人も、自分の事情でたまたまそこを通過して、道端の人を見て自発的に声を掛けたのであろう。

すなわち、この事態の展開において先行事象は後発事象が生起する前提であり、後発事象は先行事象に触発さ

れる形で生起するが、そうでありながらも、後発事象は先行事象によって一意的・決定論的に生起させられるのではなく、その場に差し掛かった通行者が自発的に、ないし自身の側の事由によって行為することで生起するとみられる。そうであるならば、後発事象の生起は先行事象やその生起事由の所為には還元できないことになる。

このことは、このような事象生起の「散種」性を示唆している。花が咲いているのを見て人が立ち止まったり、道端で写真を撮っている人を見て他の人が声を掛けたりといった各々の局面の展開は、先行事象から、単に先行事象やその生起事由の所為には帰しえない新たな後発事象がいわば散種的に生起したものと捉えることができる。

この展開は、先行する事象から因果的にも内容的にも離れた別の新たな事象が生起する展開であり、その意味ではむしろ事態の「転回」と呼ぶうるものである¹⁰。つまり、一つの事象がそのまま継続していくのではなく、また事前に企図されたあるいは必然的にそうなるはずであった事象がそのとおりに実現していくのでもなく、先行事象の事由を超えた新たな出来事が、先行事象（の当事者）の立場からみて偶発的・他発的に生じて、事態の様相を変えていくということである。

道端の植物を通行人が目にして立ち止まり写真撮影をし、その様子を見た他の通行人が声を掛けて立ち話が始まり四方山話になるという事態は、このような先行事象からの散種的な事象生起が連なって、ある事象から別の新たな事象が継起して事態の様相を変え、さらにその事象からまた別の新しい事象が継起して事態の様相を変えるという形で、次々と新規な事象が継起し様相が展開／転回していく事態とみることができる。

道端の植物はこの一連の事態が始まるそもその前提となっていながら、この事態の各々の局面における散種的な成り行きで、直前の事象とは内容的・因果的に関連のない別の事象が後発していき、その結果、事態の最初にあった植物（の呈する事象）とは別の事象が入り代わり立ち代わり発生することとなる。

この一連の事態が、道端の植物に端を発して展開／転回し様々な事象が生起していく散種的な事態として捉えられる。すなわち道端の植物を発端として次々様々に展開／転回する事態を「散種的生起」の事態と捉える捉え方がここから成り立つと考えられる。

3. 街角の人間—植物関係への示唆

道端の植物を発端とした対人的事象の散種的生起という観点からは、人間・植物関係学の研究および隣接領域を含めた実践の分野をはじめ、人々の生活に関わる様々な領域で意義を示しうると考えられる。本稿ではそのうち、1)「関係なき関係」の多様な発生可能性の示唆と、2)植物を「媒介」した対人関係の発生という観点との比較

について述べたい。

1) 対人的事象の多様な生起と「関係なき関係」の発生の可能性

道端の植物を発端として散種的に事態が展開／転回するならば、道端の一つの植物から生起する事象は一つにとどまらないということが考えられる。Derridaが論じた散種の多様な産出性を鑑みると、一つの先行事象からは様々な後発事象が生起しうると推察される。

ある道端の植物（が花を咲かせたこと）から一人の人が足を止めるだけでなく、その植物を別の時刻に他の人が見て足を止めたり、絵に描いたり、花や実を摘んだりといった様々なことが起きうると考えられる。

さらに、そのようにして生起した事象からも様々な後発事象（たとえば他の人が怪訝そうに通り過ぎていく、あるいは他の人が声を掛けて立ち話になるなど）が生起しうると考えられる。その結果、展開／転回していく事態も一つにはとどまらないであろう。

ある一人の人は当事者として一つの事象に臨むだけかもしれないが、同じ植物から別の異なった事象がさらに発生しうるのであり、その植物と誰か他の人々との間で別の出来事が生じている可能性がある。現に、道端の一つの植物から多数の事象が、当事者以外の人々には知られないまま生起している可能性もあろう。

そこからさらに植物とは直接の内容的・因果的関連をもたない対人的な出来事が散種的に生起しうると。そのような出来事から遡って当の植物を探知することはできないかもしれない、その出来事に植物が「関係ある」とは誰にも気づかれなくてもいい。そのように出来事の「起源」としては顕現しないまま、散種的な「発端」として、道端の植物が人間やその社会に関与している可能性があると考えられる。

これらのことは、道端をはじめ広くまちにおける人間と植物との関係を考えるうえで次の二つの示唆を与える。一つは、植物が人に対して決定論的・一意的に影響を与えたり植物と人が相互作用したりする関係性とは異なった、植物に端を発しながらも植物とは内容的・因果的に離れた事象が生まれ続けるという、いわば植物と人との「関係なき関係」という関係性がありうるのでないかということである。もう一つは、そのような関係が道端の一つの植物から多様に発生しうるものであり、知られないまま現に発生している可能性があるのではないかということである。

こうした「関係なき関係」は研究・実践の様々な領域や人々の日常生活において、それとして認識できないかもしれない。街角の植物が何らかの事象に「発端」として関わっていたのであってもそれと気づかれぬことが多いと推察される。道端の植物を発端とした散種的事象生起という観点は、現実に生育している道端や街角の植物の顕現せざる意義について各方面で再考する必要性

を示唆することになると思われる。

2) 対人的事象生起における植物の意義の捉え方～媒介か発端か

散種的な発端という観点は、人間-植物関係の研究・実践における新しい視座にもなりうると考えられる。

従来、園芸活動を通してのまちづくり・コミュニティ形成などで植物やそれを育てる活動を介して人と人との交流が生まれるということが論じられ検討されてきた(e.g.赤澤・中瀬, 1999; 林・中瀬, 2003; 伊藤ら, 2002; 小谷ら, 1997; 真鍋, 1998; 松尾, 2005; 長沼・上甫木, 2003; 大藪ら, 2004)。松尾(2005)は植物が人と人をつなぐ媒体となることがあると論じる中で、花が訪問者や通りがかりの人との話のきっかけになることがあるとし、道端のプランターを囲む「花端会議」をその一例に挙げている。

ここで、たとえば通行人が道端の園芸植物を目に止めて見ているときにその持ち主が現れて園芸談義に花が咲くという事態を考えると、この事態では植物が通行人と持ち主という二者の関わりを「媒介」したと捉えることができる¹¹。このとき、通行人も持ち主もそれぞれ当該の植物と関わりをもっており(通行人は植物を見る、持ち主は植物を育てる)、その植物が通行人と持ち主の二者の間に介在する形となって、二者をつないだと捉えることができる。

上述の文献に表われている植物を介した人と人との交流の発生は、おおむねこのような「媒介」という観点に立って捉えられたものであると考えられる。この「媒介」の観点が、これまで研究や実践の各領域において植物と対人的・社会的事象との関係性を捉えるときの主たる「捉え方」であったと推察される。

ところで、上で議論してきた対人的事象の散種的生起においては、植物がこのような媒介の働きを示すとは限らない。たとえば足田(1981)は中国の道端で植物の写真撮影をしていたとき、通行人から自分の写真を撮影するよう促された体験を書いている¹²。このように通行者が植物に関心を示さず、最初から植物とは内容的に無関連の出来事が生起することがありうる。この場合、植物が二者の出会いの「きっかけ(発端)」であったとはいえるかもしれないが、通行者と植物との直接の関わりが判然としないので、植物が二者の「媒介」として働いたとはみなし難いであろう。

このように、植物が対人的・社会的な事象生起において「媒介」というより「発端」となっていると捉えるほうが妥当であるような事態が現実にあると考えられる。

植物が対人的交流の媒介として働く場合には当該の交流において植物がその中間に位置しており、その交流における植物の意義は比較的捉えやすい。しかし植物が散種的な発端であった場合には、先に述べたように、植物がその事態に与っているとは気づかれな

い。また逆に、そこから生じた対人的事象を植物とは無関係のものとして看過してしまうことも考えられる。つまり、植物と対人的事象との連なりが当事者にも研究者・実践家にも明白に認識されない可能性がある¹³。もし植物の媒介としての働きだけに注目するならば、そうした連なりは捉え難くなるのではないかと考えられる。

このことから、散種的な発端という観点の導入によって、媒介の観点からでは捉え難い人間-植物関係についての新たな認識や洞察が得られ、それが人間-植物関係研究および実践の諸場面で活かされる可能性があると考えられる。

おわりに

本稿ではDerridaの散種に関する論述を導きとして道端の植物に端を発する対人的事象の生起について議論し、そのような生起の散種性を捉えたいうで各種の事象生起可能性を指摘することを試みた。

今後、道端や街角の植物と関わっての人々の体験や現実の事象、Derridaの散種論、生物学的「種子」「生殖」の概念や観点、そして文学や日常表現など様々な分野における「種」のアナロジーを相互に関連づけながら、植物から発する対人的・社会的事象生起についての議論をより広げ、深めていくことができるであろう。その中で、Derridaの散種論を再吟味することや、別の新たな「散種」論あるいは「種子散布」論を構想することが必要になることもありうる。

そうした吟味や議論から人間とまちの植物との関係がさらに新たな姿で捉え直され、それによって様々な事態や関係性が現実の道端や街角で植物と人(と人)との間に新たに展開/転回していく可能性が開かれるのではないかと考えられる。まちにおける人と植物との関係を再考する「種」が今後さらに多様に生まれていくことが期待される。

謝 辞

本稿執筆にあたり、九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門 南 博文教授に御指導をいただきました。また、同研究院教育学部門 土戸敏彦教授ならびに土戸研究室ゼミ生各位より御意見と御助言をいただきました。南研究室ゼミ生各位への謝意とあわせ、ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1 e.g.「牛舎の臭いのする、村落のなかを過ぎて、丘への登り道にかかる。(…)ハナイカダが咲いている。(…)大きくクローズ・アップして撮影していると、後に、人が通りかかった。／「何を、うつしているん

ですか」／ふり返ると、大きいしよい籠を背にした、村のおばさんである。ハナイカダの花を指してみせると、「花はいいですね、私もこの花をとってきましたよ」と、ヤマツツジの朱色の枝花をみせた」

- 2 e.g. 「わたしは大きな樹に圧倒されるようにして、朝早くから「加茂の大クス」の絵を描いていた。すると、地元の人たちが集まってきた。いろいろと樹の話をしなが、わたしは絵を描くことを楽しんだ」
- 3 e.g. 「ヨウシュヤマゴボウは、街を歩いていると、いろいろなところで出逢う。多くは実の時期に気づく。これを好きな人は多い。紅葉もきれいだからだ。写真を撮っていると、おばさんたちが通りがかり、「うちでも育ててるのよ」から始まり、いろいろ教えてくれた。花木のことだけではなくて、おばさんちのことなど余計なことまでも……」
- 4 デリダ (1972/2000) を参考に訳出した。
- 5 “(...) la dissémination *affirme* la génération toujours déjà divisée du sens.” (... 散種は、意味のつねにすでに分割されているような発生を肯定するのです) (Derrida, 1972a, 斜体原文)
- 6 「散種は終りのない〔意味の〕置換を肯定するのです」(デリダ, 1972/2000, 傍点原文, [] 内は筆者加筆)
- 7 「(...) 散種は、発生的、豊饒的、生殖的な、そう、むしろ生殖的な、と言うべきでしょうね、そういう生殖的な肯定を含むという点で、脱構築よりもより遠く、より深いところに達するように私には思われるのです」(デリダ, 1989)。ただしDerridaは多くの著作で脱構築も「肯定」であるとしている。
- 8 (「散種の子供」について議論する中で)「... 子供は自由であり、話し、自分のもつ名のかなたで、自分の言うことに責任がある… (...) こういった事実はすべて、子供は両親へ再帰しない、ということを示しています」(デリダ, 1989)
- 9 (「西洋的なもの」(たとえば科学技術) が世界に広まることについて、「西洋」を「父」とみなし)「ディセミナシオンとは、父に帰属しないものの謂である、とどこかで私は言っています。西洋的素朴さは次のように言うところにあるのです。「私はこれから世界中に種をまいてやろう。そうすれば、世界中が私に帰属し、私の名を承認するだろう」と。けれども、実際に起こっていることは、父に帰属しないことによってしかそれはうまくいかない、ということです。父に帰属しないことによってのみではありません。そうではなく、それは父から来たのではないこと、その動きは父から来たのではないことを明瞭ならしめることによってしか、それはうまくいかないのです」(デリダ, 1989, 傍点原文)
- 10 閉じていたものが開かれ広げられることが「展開」であるなら、散種は厳密には展開とは呼べない。閉じ

て隠れていた事象が露になったわけではないからである。むしろ「事態が急転回する」という意味で、「転回」と呼ぶべきかもしれない。以下、「展開／転回」と標記して、そのニュアンスを表したい。

- 11 このようなとき、持ち主は必ずしも通行人と園芸談義がしたくてその植物を育てているわけではないであろう。仮にそうであっても、通行人がその植物を見て立ち止まるかどうかは通行人の側の事情によるであろう。その点で、多くの場合このような媒介的な事態でも事象は散種的に生起するとみることができる。このとき、その植物が「発端」なのかどうかは議論の余地があるであろうが、少なくとも通行人が足を止める事象は植物に端を発しているともみることができ、その点で實際上「媒介」と「発端」とは重なっていることがあると考えられる。
- 12 「交差点に高くそびえるユーカリの並木を撮影していると、カメラの前に立った、人民服のおばさんがいる。私が、手をふって、のいてほしいと身振りをする、何を思い違いしたのか、にっこり笑って、ポーズをする始末だ。何だか話しかけてくるが、さっぱりわからない。急いで通訳氏を呼んで聞いてもらおうと、(…) 写真がほしいということだった。住所と名前を手帳に書いてもらって、シャッターを切ったら、手を振りながら、にこやかに去っていった。(後に、焼増しを送ったら、南寧から礼の葉書が来た。)」
- 13 たとえば、植物や園芸活動の意義や効果をアンケート調査で検討するときに、散種的に生起した植物と無関連のコミュニケーションを研究者が看過したり回答者が想起できなかつたりする可能性が考えられる。

引用文献

- 赤澤宏樹・中瀬 勲. 1999. 高齢者の緑化活動によるコミュニティ形成の構造に関する研究. ランドスケープ研究 62(5): 631-634.
- 足田輝一. 1981. 草木を訪ねて三百六十五日. 新潮社. 東京.
- デリダ, J. 1972・2000. ポジション 新装版 (高橋允昭訳). 青土社. 東京.
- デリダ, J. 1989. 他者の言語 デリダの日本講演 (高橋允昭編訳). 法政大学出版局. 東京.
- 林まゆみ・中瀬 勲. 2003. 近隣密集型のオープンガーデンにみられる人と植物とコミュニティの関係—神戸市神戸北町地区の事例から—. 人間・植物関係学会雑誌 3(1): 23-28.
- 林 好雄. 2003. 散種. pp.100-101. 林 好雄・廣瀬浩司. 知の教科書 デリダ. 講談社. 東京.
- 平岡忠夫. 1999. 巨樹探検 森の神に会いにゆく. 講談社. 東京.
- 伊藤信太郎・斎藤庸平・赤澤宏樹. 2002. 仮設住宅にお

- けるコミュニティ形成につながる高齢者の緑化活動に関する研究. 環境情報科学論文集 16: 223-228.
- 小谷幸司・柳井重人・島田正文・勝野武彦・丸田頼一. 1997. 東京都中央区における路地の緑の実態と住民意識に関する研究. 環境情報科学論文集 11: 261-266.
- 真鍋千恵子. 1998. 下町の緑の実態と効用～街と人とを緑がつなぐ. ランドスケープ研究 62(1): 42-44.
- 松尾英輔. 2005. 社会園芸学のすすめ 環境・教育・福祉・まちづくり. 農山漁村文化協会. 東京.
- 南 孝彦. 2005. まちかど花ずかん. ソフトバンクパブリッシング. 東京.
- 長沼真美・上甫木昭春. 2003. 神戸市の街路空間における沿道住民による「勝手花壇」の実態と住民意識に関する研究. ランドスケープ研究 66(5): 819-824.
- 大藪崇司・下村 孝・小松さち恵. 2004. 住民へのアンケートによる京都市内の街路空間における植物栽培の実態調査. ランドスケープ研究 67(5): 717-722.
- 高橋哲哉. 2003. デリダ 脱構築. 講談社. 東京.